

FIGU-Landesgruppe Japan



# フィグ・ヤーパン通信

第47号

FIGU-JAPAN BERICHT, Nr.47

発行日 2011年9月1日

発行 フィグ・ヤーパン <http://jp.figu.org/>

## 太陽嵐

ビリー：……いま私が興味を持っているのは、われわれの太陽、その爆発、太陽の表面の黒点、磁場、プラズマ渦とエネルギー量、そしてあらゆる惑星や月などとの大きさの比、要するにおよそ重要なすべての事柄だ。特に興味があるのは来年のことだ。来年は太陽活動の11年周期に入り、場合によっては地球とその外側の影響範囲で激しい電磁障害を招く可能性があるからだ。それについて一般的なことをわれわれ素人にも理解できる言葉で語ってもらえないだろうか。まさに最近起きたことや、現在起きていること、そしてこれから起こるかもしれないことなどについて。

プター：最初に言っておくと、地球の科学者は太陽の寿命についてとんでもない思い違いをしている。太陽は死につつある天体であり、実際の余命は状況次第で15億年ないし25億年にすぎないからだ。さらに言っておくが、この天体は数年前から弱い活動期に入っており、2010年3月に見られたように、時々活発になるにとどまっている。太陽の活動はほぼ11年周期で起こるが、これはまた磁場と関連している。磁場は太陽の内部から押し出るエネルギーが拡散するのを妨げている。しかしこの他にもなおすべての現象過程を規定する要因は多数存在する。そこにおいて地球の科学者にはまだ謎に満ちた暗色の物質は大きな役割を果たしている。とりわけ太陽の高温エネルギーの輸送に関してそうだ。なぜなら暗色の物質の影響なしには輸送は不可能であろうから

だ。およそ摂氏6000度の太陽の表面は、天体内部からの熱エネルギーによって摂氏百万度まで熱せられる。ところが暗色の太陽黒点は摂氏4000度ほどしかなく、トンネル状もしくは漏斗状に深さ1700キロメートルの太陽内部にまで達している。このような深部では天体内部の温度は摂氏数百万度である。この温度によって太陽内部の物質は電荷を帯びた気体、すなわちプラズマに変わる。これらの物質は時速10万キロメートルの速度で燃えるプラズマとなって噴出口の周囲に射出される。黒点が集団で発生すると、そこから巨大な太陽嵐が生じて通常の原因の何十億倍分にも相当するエネルギーを放出する。太陽はたとえ死につつある天体であってもまだ生きており、太陽系の領域に途轍もないエネルギーを放射している。その太陽は現在のところ穏やかな活動期にある。来年は再び活発な活動期に入ると予想されるが、それは途方もなく大規模で、地球上の自然や人間が作り上げてきた電子機器などに多大な被害をもたらす可能性がある。基本的に激しいプラズマ噴出はとうに起こってよいはずなのだが、活動はいわば最小限に落ち込み、これまでのところ大きな噴出はない状態が続いている。しかしなおのこと目前に迫っている新たな活動は非常に激しいものになると予想されるのである。事実、現在太陽内部ではすさまじい変化が起きている。それは外的作用の形で現れ、たとえば太陽表面に広範囲にわたる物質の流動が生じた。その流動は減衰した黒点から発生した残留磁場を太陽の極域に向かって運び、そこ

で再び太陽の内部に25万キロメートルの深さまで下降し、そして再び赤道に向かって動く。このような太陽内部の深い所で残留磁場は再び長く伸びて強くなる。つまり残留磁場は新たにエネルギーを蓄えた後、再び活発になり、またもや表面にほとぼしり出て新しい黒点を形成するのだ。そこからまたこの物質流動は太陽表面がさまざまな速度で回転するのとあいまって太陽磁場の転極を引き起こすが、これは11年ごとに現れる。通常物質流動は極域に向かって非常にゆっくり、時速約2.7ないし3.7キロメートルの速度で移動するが、7年ほど前からこの速度は時速50キロメートルほどになっている。流動がこのような速くなった結果、太陽の赤道で磁場の発生が妨げられる。これは地球上で最近3年間ひどい厳冬が続いた理由でもある。黒点は高温のガスとプラズマを運ぶ巨大な漏斗状の磁力線のループに囲まれており、太陽の本来の磁気特性を示す。特大のエネルギー噴出が起ると、磁力線とプラズマは太陽から離脱して勢いよく飛び出す。磁気エネルギーであるプラズマループが太陽から飛び出す時、その長さとは幅は10万キロメートルを超え、この時に太陽表面に巨大な黒点も発生するのである。黒点の発生が増えると、その結果として太陽表面を突破する磁力線も多くなる。したがって磁場が強ければ強いほど、多くの黒点が現れ、逆に弱ければ弱いほど、発生する黒点も少ない。太陽の磁場は太陽圏電流層と呼ばれるが、回転しながら螺旋放射状に全太陽系に影響を与え、それはカイパーベルトの最も外側領域に、さらにそれを少し越えたところにまで及ぶ。これらの黒点から太陽内部に発する磁力線が流出するが、この時放射されて地球に到達する太陽のエネルギーは途方もなく大きい。概算すると毎秒およそ1億5500万基ないし1億6000万基の原子力発電所で生産される量に相当するエネルギーが地球に到達する。このエネルギー量は極めて莫大で、そのわずか0.01パーセントで80億人の地球人類の全エネルギー需要をカバーできるほどだ。また、太陽系の惑星や月などとの大きさの比について言えば、これらは太陽系の全物質量の99.8パーセントを包含する中心天体に対して、かろうじて0.2パーセントを占めるにすぎない。言ったように太陽は死につつある天体で、あと15億年ないし25億年しか存在しない

が、現在の活動年齢は約50億年である。だが、本当に最初の起源はこれよりはるかに古く、原エネルギーに由来するが、その年齢は地球の科学者には計算できないばかりか、それ自体が空想的に思える。なぜなら原エネルギーは宇宙全体の初期の形態にまでさかのぼり、その存在について地球の科学者は知識も理解も欠いているからである。すなわち彼らには理解することも究明することもできないが、目に見える物質的な宇宙は宇宙の4番目の帯にすぎない。宇宙全体は7つの帯からなっており、4番目の帯だけが銀河、星雲、太陽、惑星、月などを持っている。内側と外側のそれぞれ3つの非物質的なエネルギー帯は見ることができず、したがって物質的な帯もしくは物質的な宇宙を挟んでいる内側と外側の2つのエネルギー帯も見えないが、これらの帯からいわゆる宇宙マイクロ波背景放射が出ている。やはり地球の科学者たちの知らないことだが、これらの物質帯は490億年ごとに新しく生まれ変わり、それが最後に行われたのはおよそ170億年前だった。今日の物質宇宙はすでにこの絶えざる生まれ変わりの3度目の形態であり、7つの帯からなる全宇宙の年齢は約46兆年である。だが、話を太陽に戻そう。太陽系に存在するすべての生命形態にとって太陽は生命を意味し、地球の奥深くまっ暗闇の中で生きつつして太陽光を見ることがない生命形態も太陽エネルギーの恩恵を受けている。自転しているのは惑星だけでなく、同様のことは太陽でも起きており、自軸のまわりを4週間という固有の周期で回転している。だが回転時間および回転速度は赤道と極付近と、それらの間の地域で異なる。それによってのみ太陽は最も深い地点で生み出されたエネルギーを、そのシステムの最も外側の縁にまで押し出すことができるのだ。回転速度が異なる部分の間で摩擦が生じることによってはじめて、絶えず入り乱れて渦を巻く磁力線が形成される。この場合、渦を巻く範囲が広くなればなるほど、太陽の活動は活発になる。現在のところ太陽は弱い活動期にあり、あまり活発ではないが、これは黒点の数が少ないことにも現れている。これらの黒点も寸法は小さくない。実際、黒点はよく地球が5個か6個入るほどの大きさにもなるからだ。大きさと言えば、太陽はもう数百年前から衰えて、つまり収縮している。それはこの星が死ぬ

最初の崩壊現象であり、太陽系に生命を与え続けている天体はあと 15 億年ないし 25 億年しか存在できない。しかし、この天体も非常に活発になれば再びやや拡張もしくは膨張する可能性があることは言うておく。だが、これはある周期の中でのみ起こり、そのあとは縮小もしくは収縮して再び元の形態に戻る。今回の周期が転換すると何が起こるかはまだ最終的に確かではない。言えることは、原始世界のごとき磁場のアーチが出現し、それによって地球上で地球人が作り上げてきたすべての電子機器が地上や周回軌道で麻痺すれば、地獄になるだろうということだ。今日の電子技術、したがってまた地球上のすべての電子機器は太陽嵐やその他の宇宙線に対して極めて敏感であり、強い太陽嵐が発生してそのエネルギーが地球に達して電子嵐を引き起こしたら、すべてが崩壊する恐れがある。すなわち電子嵐が電流を誘導し、それによって無数の電子機器やあらゆる種類の電磁装置、そしてまたなんらかの形で電力と関係のある原子力発電所やその他の発電所、機械、乗り物などが機能しなくなる可能性がある。このようなことが起こったら、なにもかも無害ではすまなくなる。なぜならそのような弊害が発生したら、経

済や医療の大部分や飲料水供給がだめになるだけでなく、食品の生産や不可欠な輸送、略奪に対する一般的な安全措置も機能しなくなるからだ。そればかりか、地球人の全成果に関して発展は逆戻りして、およそあらゆる分野で被害が生じ、それを取り除くのに何十年もかかるだろう。地球人と彼らの政府は財政的にも破綻の際に追いやられるだろう。つまり彼らはおよそ発生した被害と取り組んで取り除こうとしても支払いきれなくなるだろう。犯罪や犯行に、見渡せないほど多くの害悪が生じるだろう。これらのことは、実際に太陽の活動が過度に活発になって破局が生じれば起こるだろう。しかしそれが起こるといえるのはあくまでも可能性にすぎず、予告ではない。なぜなら、太陽の活動がまどろみから目覚めた時に何が起きるかはまだ確かではないからだ。

ビリー：ありがとう。私がもともと期待した以上のことを語って説明してくれた。だが、すべて言われた通りであるのは間違いない。

(2011年3月7日の第515回会見記からの抜粋)

## Q&A 質問と回答

### □読者の質問

親愛なるビリー、あなたはこれから出る『タルムード・イマヌエル』の新版で、イサ・ラシードが誤って翻訳した様々な言葉や概念、一部気がつかないで抜かした箇所を訂正すると言いました。これについて今後刊行されるいずれかのFIGU公報でもう少し詳しく教えてもらえませんか？ よろしくお願ひします。

ダイソン・ディヴァイン (オーストラリア)

### □ビリーの回答

親愛なるダイソン・ディヴァイン

『タルムード・イマヌエル』の全面改訂版は、従来の版とはもはや比較できない。毎週水曜日と金曜

日の晩に様々な著作の校正に携わっているキッチン校正グループが最近タルムードを校閲したが、マルクス=イサ・ラシード（これが彼の名前の完全な表記である）は様々な概念を本来の形で翻訳しなかったことがすぐさま明らかとなった。たとえば JHW H の概念に彼は一貫して〈神〉の概念を当てているし、〈処女マリア〉も宗教的な用語から取られている。というのも『タルムード・イマヌエル』では常に〈若い女マリア〉としか言われていないからで、そこには根本的な違いがあることは言うまでもない。そのためビリーはプターに正しい形を尋ねるとともに、彼を校閲作業に関わらせた。その結果またアラハト・アテルサータ水準にまで諮問して、『タルムード・イマヌエル』を再び元の形に戻そうとした。マルクス=イサ・ラシードが家族と一緒に一時滞在していたある難民キャンプで原書巻が火災で焼失したために、プレーヤール人のもとにも完全な原本

は残っていない。写本やコピーをまったく作らなかったからである。プレヤール人は翻訳が終わって必要なくなった『タルムード・イマヌエル』の原書巻の一部を、それもしばらく経ってから回収して保管したにすぎなかった。しかしそれはタルムードが破壊された時点でオリジナルの約4分の1にすぎなかったため、彼らのもとにも原本の大部分は欠けていた。アラハト・アテルサータ水準を介在させたのは何よりもそのためであった。なぜならアラハト・アテルサータ水準のみが同水準に完全な形で記憶されている最初のオリジナルテキストにまだアクセスできたからである。その上アラハト・アテルサータ水準はオリジナルが古代アラム語で書かれた『タルムード・イマヌエル』の幾つかの概念について情報を与え得る唯一の出所でもある。学識の高いプレヤール人の言語学者でさえも、イスカリオテのユダ (Judas Ischkerioth) が書き記す時に用いた幾つかの太古の概念を究明できなかつたからである。アラハト・アテルサータ水準によればイスカリオテのユダ (Judas Isharioth) の名前も太古以来誤って書かれ、それゆえにまた誤って伝えられてきた。この文字に精通したイマヌエルの使徒の本当の名前は Judas Ischkerioth だったが、これも新しい『タルムード・イマヌエル』で訂正されるだろう。

マルクス＝イサ・ラシードはプレヤール人から個人的に接触されたかという質問も出たので、以下に『タルムード・イマヌエル』新版から説明の一部を引用する。

『『プレアデス／プレヤール人との接触記録』第1巻57、58ページには、1975年2月25日18時02分に行われた第7回会見でM.ラシードという人物についてセムヤーセが与えた説明が載っている(文25～43)。彼女の言葉から、まだ接触記録を十分読んでいない者は、本当はマルクスではなくイサと名乗っていたラシードは、プレヤール人によって直接接触された、つまりインパルスによって接触されたのではなかったと推定する。しかしそれは実際には間接的なものでしかなかった。というのもセムヤーセは〈私たちの会見者の一人〉という言葉で、イサ・ラシードは彼ら、すなわちプレヤール人からインパルスによってコンタ

クトされたことを言おうとしたに他ならないからである。当時彼女は次のように説明したが、私は史実に照らして括弧内に注を付けて訂正した。

**セムヤーセ**：……まず最初に前回のあなたの質問に答えることにします。M.ラシード(ビリー注：彼の完全な名前はマルクス＝イサ・ラシードだったが、イサ・ラシードとだけ名乗った)は、すでに1956年から私たちの会見者の一人でした(ビリー注：それはインパルス接触にすぎなかった)。あなたも知っているように、彼はギリシャ正教会の司祭(ビリー注：教区付き司祭)でした。私たちは彼にさまざまな仕事を(ビリー注：インパルスによって)依頼し、彼もまたそれを果たすと約束したのです(ビリー注：プターの証言によると彼はインパルスに従っただけである)。そこで彼ならば非常に困難な使命もやり遂げることができるだろうと、私たちは判断したわけです。そして彼に『タルムード・イマヌエル』を発見できる場所を教えました。後であなたが見つけた本です。すなわち、イマヌエル(ビリー注：別名イエス・キリスト)の生存中にイスカリオテのユダが書いた書物の原本です。彼は私たちの力を借りて古代アラム語を学び、この書を翻訳できるまでになりました。彼はこの仕事を非常に正確に行い、ドイツ語の翻訳を仕上げましたが、この翻訳書のことはあなたも知っていますね。ところがM.ラシードは原本を読み進めるうちに良心の呵責にとられ、何を真理と認めればよいのか急にわからなくなってしまうのです。表向きはタルムードを信じているという確信を装っていましたが、実際には心の奥深くまで宗教が根を下ろしていたのですね。それで良心の呵責に陥ったというわけです。彼が正式に宗教の信仰から(ビリー注：教区付き司祭職から)離脱して、この書を翻訳するという使命に専心したのも、そのためだったのです。それにもかかわらず彼は非常に正確に成し遂げました(ビリー注：残念ながらこのセムヤーセの判定はまったく誤りだったことが判明した。彼女はアラム語を理解しないため、イサ・ラシードの翻訳が正しいと思い込んだのである。遺憾にも彼女は彼の仕事をチェックできなかった。それが行われたのはずっと後になってからで、その時はすでに『タルムード・イマヌエル』

書が出回っていた。だが、それはそれで良かったことが後で明らかになる。これについてはなおプレイヤー人プターの説明が続く)。しかし言ったように、彼は自分に確信がもてず、どうすればいいのかまったく判断できなくなってしまったのです。しかも、この書が誰かに発見されて知れ渡るのを絶えず恐れて暮らしていました。そこで私たちは万一の場合を考えて、恐れを知らず、人格的にも知識の面でもこの書の安全を確保できると私たちが確信するに足る人物をM. ラシードに差し向けることにしました。それがあなただったのです。しかし残念なことに、M. ラシードはますます強く恐怖にとらわれて混乱し、自分をも『タルムード・イマヌエル』をも危険に陥れるようなことを、べらべらとしゃべり始めたのです。追い詰められたラシードは、1974年の半ばにはエルサレムを去り、レバノンに逃亡せざるを得なくなりました。レバノンでは偽名を使って難民キャンプで暮らしました。家族も一緒でした。しかし彼はそこから逃亡しなければならなくなり、国外に脱出しました。彼は恐怖のあまり、『タルムード・イマヌエル』全巻を板壁の中に入れて隠すという過ちを犯しました。その数時間後にイスラエル軍が侵入し、それらは火災によって跡形もなく消え去りました。彼のせいですべて焼失してしまったのです。しかしそれは本来私たちの責任でもあります。彼をあまりに信用し、彼からあまりに多くを期待したのは私たちだったからです。そのためにキリスト教およびそれに関連しているその他すべての宗派や宗教の虚偽を、いずれの日にか明らかにすることができたであろうきわめて貴重な証拠を失ってしまいました。しかし、まだ書の4分の1ほどはドイツ語版で残っています。真理を明るみに出し、人間を恐ろしい妄想から解放するには、これで十分でしょう。(ビリー注：ここで言われているのは、イサ・ラシードが私に送った全体の4分の1の翻訳のことである。これに対応するオリジナル全巻の4分の1はプレイヤー人が確保して所有している。というのも彼らは、イサ・ラシードが翻訳してからロジェ・ド・ポラツキー公にドイツ語に直させた部分を順次回収したからである。イサ・ラシードはあまりドイツ語を話さなかったため、彼の翻訳はアラビア語と英語が主で、ドイツ語はわずかしかなかった。他方、ロ

ジェ・ド・ポラツキー公はこれらの言語はマスターしていたが、アラム語はできなかったのだ。しかし現在の翻訳はプレイヤー人の文字に精通している者の作業と、純粹霊アラハト・アテルサータ水準の非常に重要な協力の上に成り立っており、したがっていまや絶対に正確な翻訳作業が新しい『タルムード・イマヌエル』として完成したのである。)

1975年7月17日に行われた第31回会見でプターは、プレイヤー人が個人的なコンタクトとインパルスによるコンタクトを区別していることを詳しく説明した。(文71および文972～977)：

**プター**：確かに我々は他の地球人ともコンタクトを取っているが、それはごく少数にすぎず、彼らとのコンタクトは、君たちが好んで使う言い方をすれば無意識のインパルスによるものでしかない。……

地球上の本当の会見者(ビリー注：被接触者に意識されないインパルスコンタクト)の正確な数は現在(1975年)17422人だ。彼らは君たちの言うすべての国または国家に分布している。しかしすでに述べたように、彼らのうちコンタクトの事実を公表しているのはほんの一部にすぎない。彼らの多くは特定の事柄に関して我々のインパルステレパシーによる指示に従って働き、自分たちの部分的な使命を果たしているだけだ。だが、どんな場合でもこれらの人物は我々とコンタクトを持っている。とは言っても、彼ら自身は我々とコンタクトを持っていることや、我々が存在し、地球とかかわっているということは知らずにいるのだが。だがこれらの会見者の中には、政府で何らかの地位を占めている人間は一人も含まれていない。また、我々自身の生命体で地球の政府に入り込んでいる者もない。17422人の会見者(ビリー注：この数は絶えず増え続けている)のうち、公然と活動していることが公的に知られているのはほんの数百人だけだ。……

イサ・ラシードは1956年にプレイヤー人からインパルスによって私エドゥアルト・アルベルト・マイヤーとコンタクトを取るよう求められた。その当時私はアスケットに伴われて初めてエルサレムに行

っていた。もちろんそれはアスケットが公然と誰にでもわかる形で登場したことを意味しない。その後も私は何度かエルサレムに旅行して短期間または長期間滞在した。

イサ・ラシードはインパルスに従って行動し、すぐに私エドゥアルト・アルベルト・マイヤー（〈ビリー〉という名前は後にテヘラン／ペルシャ＝イランで付けられたものである）に接触してきた。イサ・ラシードはイマヌエルの本当の墓を探し出すという考えを抱いた、と言うよりインパルスで指図された。そして彼はそれを実行し、6年間というもの多かれ少なかれこの使命に専心した。

それから1963年、私エドゥアルト・A.マイヤー（その頃私はテヘラン／ペルシャもしくはイランでジュディー・リードというアメリカ人女性から〈ビリー〉という名前を与えられた。私が彼女に〈ビリー・ザ・キッド〉を思い出させたためである）は、アンマン、エルサレムおよびベツレヘムでほぼ1年間暮らした。この間にイサ・ラシードはイマヌエルの本当の墓と推測した場所を私に教えた。それから実際に私もその墓を見つけて中を調べ、埋められていた書卷やその他の事物を発見した。イサ・ラシードはそれまでに、やはりプレヤール人から受け取ったインパルスに基づいて古代アラム語を勉強していたので、一部は破壊された書卷を解読して翻訳することができた。ただ、イサ・ラシードは翻訳を問題なくドイツ語で書き表すことができるほどには、ドイツ語に十分習熟していなかった。そこで最も近い友人であるロジェ・ド・ポラツキー公が彼を助けた。彼はドイツ語を完璧に使いこなすことができ、ハシミテ家のヨルダン国王フセイン2世によって貴族の称号を与えられた。本人の証言によると彼はボヘミア公の出身であり、彼の家族は以前にその地へ移住か、または亡命していたのだ。しかし彼はこの移住もしくは亡命がいつ行われたのかについて、第1次世界大戦中か、それとも第2次世界大戦が始まってからかは言わなかったし、私も尋ねはしなかった。

私の新しい家族とともにインド、パキスタン、トルコ、ギリシャと仕事をしながら回って、最終的に

スイスに戻った頃、イサ・ラシードは1970年代の始めまでによく書卷のほぼ4分の1を翻訳していた。私とイサ・ラシードとの間で、できあがった翻訳原稿はその都度私に送り、仕事が完了したらその部分の原書卷も保管のために引き渡すことになっていたが、それは一度も行われなかった。イサ・ラシードは翻訳を極秘で行ったが、それは彼の仕事がユダヤ教徒やキリスト教徒の間に知られると、いかに厄介で危険か自覚していたからである。不安に駆られた彼はそのことを公然と、それも不用意な仕方話し出し、それによってユダヤ教徒やキリスト教徒は初めて原書卷の存在を知ることになった。そのため彼は1974年に家族を連れて逃げるように国を出た。この時彼は原書卷を持っていき、イスラエルの北およそ35マイルに位置するレバノン南部の難民キャンプ〈アイン・アル・ヘルワ〉に密かに紛れ込んだようだが、追手に発見されてしまった。家族と暮らしていたキャンプにイスラエルが急襲するほんの数時間前に、彼は複数巻からなる大部の書卷を板壁の中に隠した。レバノンから北イスラエルへのゲリラ侵攻に対する報復攻撃を装ったこの1974年6月20日の急襲を、イサ・ラシードと彼の家族は間一髪のところ逃れた。（これについてはジェームズ・W.ディアドルフ教授が彼の著作『コーフの誤った主張と歪曲に対する論駁』7ページに詳しく書かれている）。しかしそれからわずか2年後、イサ・ラシードは彼があれほど恐れていた運命に見舞われた。すなわち、セムヤーセによれば彼は1976年3月にイラクのバクダッドで殺されたのである。（第66回コンタクト記録、1976年11月10日14時18分）

訂正および注：2010年10月25日

イサ・ラシードがタルムードのドイツ語訳に持ちこんだ改竄と脱落は、彼がタルムードの翻訳作業に取り組む前はギリシャ正教の教区付き司祭だったことに起因している。残念ながら彼の思考にはキリスト教の信仰が深く食い入っており、教区付き司祭職をやめて宗教と関係を断った後でもイサ・ラシード自身はキリスト教を拠り所としていた。しかしイサ・ラシードはけっして悪意や邪心から行動したわけではなく、明らかにキリスト教信仰の犠牲者だった。信仰は思考と信念をすっかり覆って浸透していたの

で、彼はもはやそれから逃れることができず、何が信仰で、何が現実もしくは真理であるか判別できなくなっていた。そのため翻訳を進める過程でいずれの版が正しいか、すなわち古代アラム語で記された『タルムード・イマヌエル』の原書巻か、それとも教区付き司祭の職を通して何から何まで知り尽くしていた新約聖書かという問題に直面すると、彼は明らかにいつも新約聖書の方を優先した。彼はいわゆる福音書の成り立ちについて知らなかったか、キリスト教で伝承されている範囲でしか知らなかったようだが、それらの伝承は事実と相容れない。それゆえ彼は4つの福音書は史実の記録に基づいて成立したと信じており、それらが改竄されたなどとは思ってもよらなかっただろう。そのことはマルクス＝イサ・ラシードが犯した様々な誤訳や脱落が物語っている。たとえば JHWH という概念を〈神〉という言葉に訳したり、〈若い女マリア〉という言い回しを〈処女マリア〉と翻訳したり、『タルムード・イマヌエル』の中には幾度となく 12 使徒と 17 女性使徒が登場するという事実を隠したりした。これらの 17 女性使徒は福音書でも黙殺されているが、イサ・ラシードも言及しなかった。それどころか彼はイスカリオテのユダの2つの短い文を翻訳しなかったが、そこには2人の女性使徒、すなわちエステルとマグダレーナ・マリアは、イマヌエルが40日間不在にしている間、愛、調和と平和、悩み、争い、戦争、似姿（偶像）について教えたことが書かれている。

イサ・ラシードは非の打ちどころのない誠実な人間であり、絶対的に信頼できたことはプレヤール人も認めた通りで、『タルムード・イマヌエル』の原書巻の翻訳を通して多くのことを読んで学んだにもかかわらず、残念ながら彼は自分の思考に潜んでいる信仰の影を認識することができず、書巻に書かれていることを素直に翻訳するということができなかった。自分の中に食い入っている信仰の深さと、それが思考に与える途方もない影響を認識できず、そのため実際に自分の宗教的思考とキリスト教的な信念から本当に離れることはとうてい不可能だったのである。キリスト教とそれに対する破壊的信仰による思考の浸透もしくは汚染はそれほど深く、強烈だった。その結果はこのうえなく悲惨なものだったが、

それは自分自身にも降りかかった。最後に彼はキリスト教に対する信仰も、信仰の原理も、そして命さえも失ったからだ。悲惨な結果は、『タルムード・イマヌエル』の初版についても言える。イサ・ラシードはほとんど一文一文を誤訳し、翻訳の広い範囲にわたってキリスト教的な想念の産物やキリスト教信仰の要素に影響された。彼は身に付いた信仰姿勢によって、自分のキリスト教的な〈信仰知識〉（知っていると感じている時も信じているのであるからそれ自体矛盾である）の背後を問うことをしなかったために、絶対に必要な中立性と客観性を見出すことができなかった。それゆえ彼はまったく職業倫理に反して、自分で理解して検証でき、したがって自分のキリスト教の刻印に基づいて支持できることだけを翻訳したのである。このような姿勢から、彼にはイマヌエルには実際に女たちも女性使徒として付き従い、さらには教えもしたということは絶対に考えられなかったようだ。それゆえ彼は女たちが学んだり教えたりした活動を示唆する箇所はすべて自分の翻訳であっさり省略したのだった。まさにこのような行動形態と事実は、キリスト教の信仰が、そしてまた信仰そのものがいかに強く持続的に思考を制限して妨げるか、そしていかに強大な力をもって人間を事実から、したがってまた真理から遠のけるかをきわめて明白に示す格好の例である。信仰に基づいて下される誤った決断や判断は、『タルムード・イマヌエル』の初版に限らず、およそ考えられる限りの生活領域できわめて恐るべきもので、まったく壊滅的である。

それゆえ、キリスト教の教えの影響がはっきり認められ、版を問わず新約聖書を熟読した者ならば、マルクス＝イサ・ラシードの手になる古い『タルムード・イマヌエル』の翻訳全体を通して、両者は全ページにわたって類似していることに気付くだろう。そのようなことは全面的に改訂した新版にはもはやない。『タルムード・イマヌエル』の初版と、このたび直接原本に準拠して改訂された新版を直接比較すれば、非常に興味深く、またきわめて有益であろう。

ベルナデッテ・ブランツ (スイス)

## フィグ・ヤーパンからのお知らせ

### □ FIGUスイスセンター訪問報告 □

フィグ・ヤーパンでは、5月に開催されたFIGUの一般会員総会に合わせてFIGUスイスセンターを4名のメンバーで訪問致しました。今回のセンター訪問の目的は、一般会員総会でのフィグ・ヤーパンの活動報告に加え、全国読者集会でご紹介する予定の取材を行うことでした。

FIGUの一般会員総会とは、年に一度5月の第4土曜日に開催されるFIGUスイスの会員制度の一つである一般会員の総会のことです。今年の総会は、5月28日(土)にセンターから約4キロメートル程北にある小学校の体育館を会場として開催されました。そこに世界各国から約100名の一般会員が一堂に会しました。総会では、FIGUの基幹会員による年次決算報告や人口過剰グループによる活動報告、インターネット関連報告、新刊書報告などに続き、5カ国の国内グループと3カ国のスタディグループからの一般会員による活動報告が行われました。その国内グループの筆頭として、私たちフィグ・ヤーパンは年次活動報告をドイツ語で行いました。その後は、基幹会員や一般会員によるスライドショーなどのプレゼンテーションが昼食を挟んで行われました。

今回の訪問のもう一つの重要な目的として、ビリーのインタビュー取材を行いました。インタビューは、センターの母屋の玄関前のポーチを使って行われました。ビリーは今年で74歳になりましたが、とてもお元気そうで、事前にフィグ・ヤーパンから提出しておいた10の質問に沿って、人口過剰問題や気候温暖化、創造についての質問にとっても丁寧に答えて頂きました。その他、福島第一原子力発電所事故に関しても追加の質問をしましたが、既に3月のコンタクト記録で報告している以上の事実は知らないとのことでした。

今回のインタビューは、ビデオ撮り致しましたので、次回の全国読者集会で報告すると共に、残念ながらご参加いただけない方へもDVDビデオとして販売する予定です。全国読者集会では、各国から集った一般会員のセンターでの共同作業の様子も交えて報告する予定ですのでどうぞご期待ください。

### □ 第10回全国読者集会開催日延期について □

『フィグ・ヤーパン通信第46号』におきまして、延期のご案内をさせていただきました第10回全国読者集会につきましては、諸般の事情により、下記の日程へと延期させていただく事となりました。ご了承願います。

#### 日 程

開催日：2012年2月12日(日)

時 間：13:00～16:30まで

(17:00～18:00に懇親会を予定)

会 場：日本青年館502会議室

東京都新宿区霞ヶ丘町7番1号

電話 03(3401)0101

JR総武線 信濃町駅または

千駄ヶ谷駅より徒歩9分

### □ 被災された読者の皆様へ □

フィグ・ヤーパンでは、東日本大震災によって書籍類を損失された読者を対象に、これまでお求めになられたものと同等の書籍類を無償でお送りしています。該当する方は、フィグ・ヤーパンまでお気軽にご連絡ください。2012年3月末まで受け付けています。

#### フィグ・ヤーパン通信 第47号 (無料)

発行日 2011年9月1日

発 行 フィグ・ヤーパン(FIGU-Landesgruppe JAPAN)

住所 〒192-0916

東京都八王子市みなみ野3-11-2-305

電話 042(635)3741

FAX 042(637)1524

URL <http://jp.figu.org/>

E-mail [info@jp.figu.org](mailto:info@jp.figu.org)

郵便振替 00160-4-655758

加入者名 FIGU-JAPAN

本書の全部または一部を無断で複製複製することは、著作権法上の例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、フィグ・ヤーパンにご連絡ください。

Copyright (c) 2011 by FIGU-Landesgruppe JAPAN. All rights reserved.